



もんぶ かくだいじんしょう
文部科学大臣賞

受けつがれる祖父の味

茨城県小美玉市立羽鳥小学校六年

山口 哲平

ぼくの祖父が作るお米は世界一のお米です。宝石のようにつやつやにかがやいていて、かめばかむほどにあま味がでる、食べた人はみんな祖父のお米のとりこになってしまいうほどとてもおいしいお米です。

そして、その祖父が作った世界一のお米で魔法のようなおにぎりをにぎるのが、ぼくの祖母です。祖父が育てたお米で、おにぎりをにぎる祖母の顔は、とても幸せそうです。そんな祖母が作るおにぎりは大人気で、一口でもそのおにぎりを食べた人は、一しゅんで笑顔になってしまいます。人を一しゅんで笑顔に変える、魔法のおにぎりです。

祖父が「一つぶ一つぶ愛情をこめて作ったお米」に、また祖母が「一つ一つ愛情をこめてにぎるおにぎり」ぼくは、そのおにぎりが何よりも大好きでした。

でも、もうそのおにぎりも食べることはできません。ぼくの祖父が、突然この世を去ってしまったからです。

「じいじのお米、世界一おいしい。」

何ばいもご飯をおかわりするぼくを見て、

「今年もおいしいお米を作るから、楽しみにしてろよ。」

と、ぼくの頭をなでながら、うれしそうに笑う祖父。今年もって、約束したのに。家族のみんな、泣きました。たくさん、たくさん泣きました。

春が近づき、祖母は、今まで祖父が大事にしてきた田んぼをどうしようかとやんでいました。

「もう、じいちゃんはいないから、田んぼがあってもしょうがないね。」なみだをうかべ、悲しそうに祖母は言いました。「大好きなじいじが作ったお米は、もう食べられないけれど、じいじが大切に守ってきた田んぼまでなくなっちゃうなんて・・・」ぼくのむねが、何だかチクチクいたみました。

それから何日かたって、田植えの時期がやってきました。「もう、じいじのお米食べられないんだ」悲しい気持ちで祖母の家に行くと、「てっちゃん、じいちゃんの作ったお米は食べられないけど、じいちゃんが大事にしていた田んぼで、またお米を作るよ。」

びっくりしているぼくに、祖母は優しくゆっくりと話し出しました。今は埼玉に住んでいるおじさんが、いつの日か、じいじの田んぼで、じいじに負けないくらいおいしいお米を作ると言ってくれたこと。そして、それまでの間、近所の人達が、じいじが大切にしていた田んぼを守ろうと協力してくれること。

ぼくは、またむねがいたくなりました。でも、前のいたみとはちがいます。祖父の思いが、たくさんの人によって守られ、受けつがれているんだと、ぼくはとてもうれしくなりました。今年もまた、祖父の田んぼには、たくさんいなか大き大きくゆれています。